

巻頭言 ネットワークの上で発展する核医学

千田 道雄

Senda Michio

(神戸市立医療センター中央市民病院 分子イメージング研究部長)



このたび第 60 回日本核医学会学術総会の会長を拝命し、第 40 回日本核医学技術学会総会学術大会（長木昭男大会長）と合同で、2020 年 11 月 12 日（木）から 14 日（土）まで神戸市にて学術総会を開催します。核医学は RI の医学利用ですが、RI の利用が全般的に伸び悩む中で、核医学は伸びている数少ない分野です。特に近年は PET と内用療法の実用化が著しく、両者を組み合わせた“theranostics”も含め今後の展開が期待されます。というわけで、本誌の読者の期待を背負って学術総会を企画しました。

今年は、新型コロナウイルスに蹂躪されて世の中の計画すべてが狂ってしまいました。幸いこの原稿を書いている時点では、わが国での感染拡大もとりにあらず一段落し、大会を通常どおり開催する予定で準備を進めております。しかし、もし再度感染爆発が発生した場合は Web 開催に切り替える可能性もあり、また通常どおり開催するとしても新しい生活様式（ニューノーマル）のもとで、いろいろとご不便をおかけすると思っておりますがご了承下さい。

学術総会のメインテーマは「ネットワークの上で発展する核医学」としました。ここでいうネットワークとは、“networking”すなわち人と人とのつながりを意味します。核医学の応用は腫瘍、脳、心臓をはじめとするさまざまな臓器と疾患の診断と治療に及ぶため、臨床利用にはあらゆる診療科との連携が重要です。また現場では、医師、診療放射線技師、看護師、薬剤師といったさまざまな医療職が、その他の技術職や事務職も含めて密接に連携するチームワークが必要です。その際には放射線管理や医療安全にも注意が必要です。同様に研究開発においても、核医学の専門家が臓器や疾患の研究者及び薬学や工学の研究者と協力することが鍵となります。更に新しい放射性薬剤や核医学機器を実用化するためには、企業の積極的参加と、規制当局との意思疎通も欠かせません。特に法規制は、医療としての規制と放射線の規制があって複雑です。更に国内外の医療機関や研究機関、企業等との交流も重要です。このように、核医学の発展はさまざまな職種と分野と立場の人たちの連携、すなわちネットワークの上で成り立つものであり、学術総会ではそのための情報交換と交流の場を提供したいという願いを込めました。

このようなねらいを念頭に、企画には工夫を凝らしました。まず、装置とデータ解析に詳しい核医学技術学会の方々と協力し、合同シンポジウムを 2 つ企画しました。1 つは最近話題の AI（人工知能）で、医用画像への利用が進むと同時に問題点も指摘されているので、賛成と反対の立場の演者が講演して聴衆が投票する「プロコン形式」のシンポジウムを行います。もう 1 つは、核医学で測定する定量値が装置やデータ収集法に依存することを背景に、標準化の問題を取り上げます。核医学会のシンポジウムとしては、脳のアミロイドとタウ及びその他のターゲットのイメージング、腫瘍の免疫治療や免疫反応のイメージング、内用療法（正式には核医学治療と呼ぶことになりました）、前立腺癌、BNCT（中性子捕捉療法）、心血管系の炎症や感染症、等のテーマを取り上げます。海外からも多くの演者を招聘していますが、万一来日できない場合も、ビデオの上映等で講演を聴けるようにする方針です。そのほか、PET 核医学ワークショップ、核医学看護フォーラム、ワーク・イン・プログレス、及び機器展示といった定番の企画も予定しています。ぜひ多くのかたにご参加いただきますよう、お待ちしております。